

多言語対応推進フォーラムの舞台裏 ～リアルタイム機械翻訳システム「BRIDGE（ブリッジ）」～

株式会社BRICK's 経営戦略部 デジタル事業開発グループ 中村 良太

令和2年12月23日、一年延期となった2020年オリンピック・パラリンピック大会の開催を見据え、withコロナ時代の多言語対応の取組を紹介するための「多言語対応推進フォーラム」が開催されました。フォーラムでは登壇者の発言を、リアルタイムで日本語から英語に翻訳し、配信画面へと字幕を表示する「リアルタイム翻訳字幕」技術が4社で分担して運用されました。



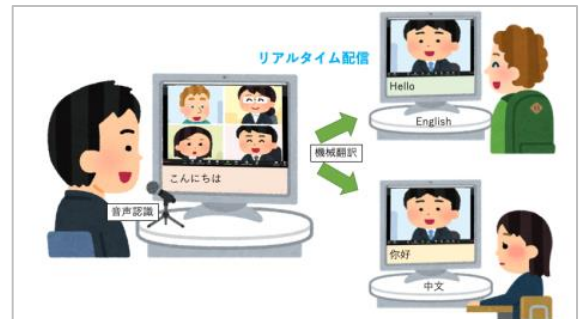
通訳・翻訳業務や多言語コールセンターなどのサービスを提供する株式会社BRICK'sでは、基調講演の時間帯に、新たなリアルタイム音声翻訳システムである「BRIDGE（ブリッジ）」技術を披露しました。

「BRIDGE」は、ブラウザのみで動作するため、端末へのアプリケーションのインストールが不要であり、誰でも手軽に利用することができるリアルタイム音声翻訳システムです。

これからのグローバルなビジネス環境下において、小さな社内会議から国際会議などの大きなものまで、AIを活用するデジタル環境へと移っていくことを想定し、開発されました。

「BRIDGE」では、資料を画面上に表示し、資料を説明しながら同じ画面で翻訳結果を字幕表示することができます。株式会社BRICK's経営戦略部 デジタル事業開発グループの中村氏は、「こうした「BRIDGE」の特徴は、これまで多言語通訳センターとして電話通訳などの外国語サポートを長く行ってきた知見が活かされたものだ。」と話しました。

「BRIDGE」は、マイク入力された音声を翻訳する事を想定したサービスのため、「多言語対応推進フォーラム」のような大規模な会場において、いかにクリアな音源を拾うことができるか、という点で試行錯誤がありました。そうした課題を事前の検証により、音声入力時にPCのオーディオインターフェースへ直接音声入力することで解決し、システム側でも認識しやすい音源として取り込むことができました。



また、「BRIDGE」は、入力された音声を遅延なくリアルタイムに翻訳するために、音声認識・翻訳性能の高いエンジンを搭載しています。さらに、簡単に字幕を表示できるシステムに改良したことにより、登壇者の話に合わせて遅延なく翻訳結果を表示することができるようになりました。

中村氏は、「今回の『多言語対応推進フォーラム』における「BRIDGE」の運用について、その特徴を発揮することができた点については、評価できる。」とした一方で、「実用化に向け音声認識・機械翻訳精度や、読みやすい字幕の表示方法にはまだ多くの改善点がある。」と話しました。

さらに、中村氏は、「今後は、人による通訳と機械による音声翻訳システムとを連携させたサービスを提供することが目標であり、これが実現できれば、音声翻訳システムだけでは対応できないような場合でも正確な通訳を可能となり、国際会議のような場において、より活用範囲が広がる。」と話しました。

中村氏は最後に、「言葉の壁を越え、より気軽に世界とのコミュニケーションができ、言語の壁がない社会を実現するために、人による通訳と音声翻訳とを連携させたサービスや、革新的なコミュニケーションツールの開発を目指したい。」と、将来への開発意欲を述べました。

(令和3年2月作成)

※フォーラムの様子は、こちらのURLからご覧いただけます👉<https://tokyodouga.jp/nf68gam9q1a.html>

